

第 27 回福島ダイアログ（日本語）

第 27 回福島ダイアログ：ふるさとへの思いー 私たちはどこから来て、どこへゆくのか　：福島の声

日程：12 月 6 日（土）　7 日（日）

共催：福島大学未来創造リサーチセンター

支援：ASNR（フランス原子力安全・放射線防護庁）

後援：大熊町

協賛：CEPN, 日本保健物理学会（予定）、日本リスク学会

目的：原子力災害は、放射性物質による環境汚染によって、人と土地とのつながりに大きな影響をもたらします。特に、自然環境や風土に根差したライフスタイルや職業ほど、その与えられる影響は大きくなります。福島事故でも、山間部の伝統的なライフスタイルや、農林水産業のような自然と直接向き合う職業は、14 年が経過した今も、いまだその影響が残っています。

また、避難によって暮らしの場から追われ、住み慣れた土地から離れざるをえなかった人たちもたくさんいます。避難指示は徐々に解除されていますが、長い避難によってコミュニティは変質し、また、物理的にも除染と復興事業によって、大きく姿を変えることになりました。

土地と人とのつながりは、たんに住まいがそこにあるという物質的な問題だけにとどまりません。精神的なつながりによって、土地は人のアイデンティティの一部ともなるからです。ひとりひとりの人生だけではなく、原子力災害は土地と人とのつながりを変化させ、拠って立つものとの関係をまで変えたといえるかもしれません。そしてその影響は、地域の歴史にも及びました。こうした無形の資産は、「社会的資本」とも呼ばれ、その重要性は広く指摘されています。

27 回目を迎える福島ダイアログでは、土地と人のつながりがどのように変わったのか、そして、この先、どのように新しいつながりを生み出していけるのかについて語り合う機会としたいと思います。

プログラム：

■ 1 日目（12 月 6 日 土曜日）

トレイル with オープンラディエーション

場所：浜街道トレイル（富岡駅～夜ノ森駅 または CREVA おおくま～link るおおくま 約 5km）

内容：途中で放射線測定や場所の解説を行いながら歩く

■ 2 日目（12 月 7 日 日曜日） 会場：クレバ大熊 1 階会議室

午前の部

10:00 ダイアログのテーマ紹介：安東量子（NPO 福島ダイアログ理事長）

10:10 第 1 発表：ジャン・マルク・ベルト（ASNR）

10:30 第 2 発表：佐々木大記（NPO 福島ダイアログ）

10:50 第 3 発表：福島の現状について

11:10 第 4 発表：インガー・マリット・エイラ＝アーレン（ノルウェー・サーミ議会議長）

11:40 質疑応答・議論

11:55 ポスター説明

12:00 昼食・ポスター見学

午後の部

13:30 IDPA ダイアログ（8名の参加者による対話）

15:00 休憩

15:30 オブザーバーからの意見・質問（3分×10人）

16:00 まとめ：Win Thu Zar

16:20 閉会の挨拶：安東量子

16:30 閉会

対話参加者（8名、順不同）

榊原 比呂志：双葉町在住

石田 恵美：JA 福島さくら女性部ふたば地区双葉支部 支部長

木村 紀夫：一般社団法人大熊未来塾 代表理事

西島 香織：原子力災害考証館 furusato 事務局長

今野 邦彦：赤字木記録紙編集委員会 副委員長

阿部 翔太郎：株式会社 ReFruits 取締役

高木 はるな：原子力規制庁職員（いわき市出身）

鷺巣 桂以子：川俣町地域おこし協力隊

IDPA（識別・診断・展望・行動）ファシリテーション手法は、複雑な状況に直面するステークホルダー間で、傾聴、参加、建設的な対話を促進することを目的とした手法です。実際の経験から、このアプローチはさまざまな文脈で生じる課

題に対して対応策を導き出すことができ、多くの場合において、その解決策に関する妥協点を見出す助けとなることが示されています。たとえそうした合意に至らない場合でも、IDPA 手法には、参加者一人ひとりが直面している状況や、他者の視点をより深く理解する手助けとなるという意義があります。